

みなさんこんばんは、ヘルタンディーです♡
本日はクリスマスパーティーにお呼びいただきありがとうございます♡
初めての方もいらつしやるみたいですね。
ごめんなさいこないやらしい格好で…(笑)
今日はみなさんのリクエストで裸のサンタさんに見てもらいました♡
初めての方も私のいやらしい体でいっぱい楽しんでくださいね♡



え？いつものポーズですか…？
はい、わかりました(笑)

みなさん♡
メリークリスマス！

螢一さんにビデオメッセージですか？
わかりました♡

螢一さん、こんばんは。
今日は家をこっそり抜け出して
自動車部の皆さんのクリスマスパーティーにお邪魔しました♡
今夜はみなさんといっぱい気持ちいいことしちゃいますね♡



私が今から自動車部のみなさんにおま〇こいられてイッチャウところを見ていてください♡
せっかくのクリスマスなので螢一さんにも
サーブಿಸポーズをお見せしますね♡
はい、螢一さん、メリークリスマス♡

この格好で外にですか？はい、わかりました。
い、いえ、そんなことは…とても恥ずかしいですよ♡

は、はい、わかりました。お寺のまわりを一人で一周してきます…。

あの、ずっとピースしたままでですか…？

はい…分かりました、ピースで歩いてきます…。

あ、あの、外に近所の方たちが…で、でも…

そんな…お願いします…(汗)

い、いえ、そんなことは…

え…そ、それは…でも…

そんな…はい…

い、行つてきます…。



「みなさん、こんにちはー

淫乱女神のベルダンディーです♡

ひ、ひとりでオナニーしていたんですけど、興奮して

裸でおさんぽに出てきてしまいました♡

今からここでオナニーを披露しますので

私がいくところをご覧になつてくださいなね♡」

ベルダンディーは猛烈な羞恥に顔を赤く染めながら

性器を指で拡げ、顔なじみの隣人たちの前で

自慰を始めた。

ベルダンディーは廊下に伏せると、でんぐり返しをする要領で両膝を抱え、自分の臀部を上に突き出した。性器と美しいアナルがこれ以上ない形で剥き出しになる。

「はい、公衆トイレの男性用にこんな形のお便器ありますよね、おしっこ用の。私はみなさんのお便器なので、いっばいかけてくださいね♡」

「好きなところを狙っておしっこしてください♡
お口を開けてますから、お顔にいっばいかけてお口の中に
じよぼじよぼ出して飲ませてくださいね。私だけでなくて
畳の上にいっばい撒き散らしても構いませんから♡」

男たちの放尿が始まるとベルダンディーの体にハチハチと音を立てて小便が
あたる。小便は性器、肛門、臀部や太もも、柔らかい乳房（あたると弾力を持つて
小刻みに揺れた）、腕、長く美しい髪、あらゆる所にかかり、彼女を小便まみれにした。
やがて小便の束はベルダンディーの顔に集中し、大きく開けた口へシヨボシヨボと
音を立てて放たれた。



「いらっしゃいませ。また来ていただいて嬉しいです。最近みなさんお見えにならなくなってしまっ……」

森里やウルド、スクルドが他力本願寺を去って数年、女神の資格を失効し瀕淫の罰として二度と天界に戻れなくなったヘルタンディーは地上で娼婦まがいの行為をして細々と生きていた。普段の行動は厳しく制限され、結界を張られた他力本願寺からは滅多に出ることもできない。



「男の方に抱かれるの久しぶりなんです…最近はずっと自分で慰めるばかりで…
こんな所に閉じ込められて気が狂いそう…今日はいっぱいいいじめてくださいね♡」



「ああ…おち○ほひさじぶり…なめてもいいですか…?」



「ああ…おいしい…おち○ほおいしいです…♡すつと我慢してたんですおち○ほ…」

数カ月ぶりに甘いものを口にしたり子供のようにならぶ男のイチモツをペロペロと舐めしやぶるベルダンディー。
かつて聖女だった面影はまったくなく、目の前の肉棒に夢中になる様子は過去の彼女を知る者に哀れみと失望を誘った。



「ふふふ…もうこのおち○ほ離しませんよ…♡」

この屋敷にも数年もたたずにつまたく人が訪れなくなる。
ベルタンデーは誰も来ない他力本願寺で永い時を一人きりで過ごし、
時折偶然迷い込んだ男を幽閉しては精を搾り取る魔女となるのだった。



「あっ」

夕飯の買い物のため商店街を歩いていたヘルタンディーは突然様元を掴まれ、そのまま店と店の隙間の、路地裏と呼ぶのさえそくわなような狭く薄暗い通路へと乱暴に引きずり込まれた。

状況が理解できないでいるヘルタンディーの顔面に男のごつい拳がお見舞される。二、三発、腹にも重いパンチが入られるとヘルタンディーはすっかり抵抗する意志を失ってしまった。

男はぐったりした彼女の服を乱暴に引き裂くとすっかり全裸にしてしまい、ぎとぎと油にまみれた路上に突き飛ばした。

朦朧としたヘルタンディーが横たわった状態でおぼろげに目を開くと数メートルも離れていない場所を商店街の買い物客がこちらに気つく様子もなく歩いている。声を上げればすぐに気つかれるだろう。だが全裸にされた彼女は恥じらいと恐怖のため、逆に見つからないことを必死に願うだけだった。

男はおもむろに覆いかぶさり、挿入を開始する。ヘルタンディーに抗う気力はなかった。男のペニスが無理矢理に彼女の下半身をこじ開けていく。胎内に異物を感じながらも現実感はなくなく、自分の体が人形のように感じられる。

「トッ！」
男のペニスがヘルタンディーの膣壁に到達した。怒張した太い肉棒が膣内を圧迫し、ピストン運動を開始する。

ヘルタンディーは

「ここでようやく腹の中を異物に

えくられる痛みと恐怖を意識したが、必死に声を押し殺すことしかできなかった。

永遠にも感じられるような数分が過ぎ、ヘルタンディーの中に精虫が発射される。虫は胎内を遡上しその後卵子に潜り込んだ。

男はペニスを引き抜くと、ヘルタンディーに舌で綺麗にするよう要求した。早く解放されたい思いから、彼女は舌でペニスを舐め取り、口を含む。男は両手でヘルタンディーの頭を抱え込むと今度は口へのピストンを開始した。

「ぐっむぐっ……」

ピストンは喉奥まで達し、ヘルタンディーの呼吸を阻害する。呼吸困難と嘔吐感で意識を失いかけた時、二度目にもかかわらずすさまじい量のザーメンが喉に直接発射された。

「げほっ、ふひゅっ…」

喉に大量発射された精液は一部が逆流し、ヘルダンディーの口や鼻の穴から噴き出す。顔を涙と鼻水と精液まみれにし、さらに大量の精液を嘔吐した。口元から白く太いぬらぬらとした筋を何本も垂らし、ゼイゼイと息を継ぐ。座り込み、肩で息をするヘルダンディーの背後に男は回り込んだ。尻を齧掴みにすると無理矢理持ち上げ、双丘を押し広げてアナルを剥き出しにする。そのままペニスをあてがうとゆっくりと挿入していく。

「！」

ヘルダンディーが気付いて反応するがガツシリと押さえられた尻は女性の力で抗わせることはできなかった。ミチミチと首を立てて尻穴が押し広げられていく。凶器のような太さのペニスにヘルダンディーのアナルにゆっくりと挿入されていた。

「……………」

真っ赤に灼けた火箸を挿入されるような激烈な熱い痛みがヘルダンディーを襲った。「ハッ、ハッ、アアアッ……！」ここまで必死に声を押し殺していたヘルダンディーだったが、ついに絶叫に近い叫びが発せられた。叫び声を聞いた男は喜び、膈壁を傷つけようと激しい動きでピストンを開始する。男のペニスが前後するたびにヘルダンディーの口からくもった叫びや呻きやが漏れ出した。男の執拗な肛虐は十数分にも及び、ヘルダンディーの尻穴は完全に裂けて血塗れとなった。男の精液を注ぎ込まれた肛門は醜くめくれ上がり、ペニスが抜かれた後もポツカリとその口を開けている。こぼれた精液がよたれのようにその開いた穴から垂れていた。

地獄の責めから
ようやく解放される…

そう思ったヘルダンディーだったが

男の性欲は全く衰えていなかった。その後何時間にも渡って肛門を犯し続け、いつ終わるとも知れない苦悶の時間をヘルダンディーに与え続けた。男はようやく満足すると最後の仕上げにこぶしを押し込み、深々と肘まで挿入すると激しくピストンさせる。「ぎゃっ…ああああ…あひいいいっ…ぎいいいっつ…!!」

ヘルダンディーの絶叫が夜の通りにこだまする。そのまま気絶し、激しい痛みで意識が戻ったときにはもう男の姿はなかった。ヘルダンディーは家に戻ろうとしたが尻穴の激痛のため上半身を腰から上に上げることができず、尻を突き出した四つん這いに近い格好で歩くしかなかった。全裸のまま無様な格好でさまよう姿はまた陽のあがらぬ早朝とはいえ多くの人間に目撃された。

「わっ、なんだこの姉ちゃん裸だぞ」
夜の公園で出くわした女性は言葉通り、一糸まとわぬ全裸姿だった。
ただでさえ異様と感ずる場面だが、なによりも現実感をそいでいたのは
その女性の美しく均整の取れた肢体ながらも男性好きのする誇張感あふれる
豊満な胸と腰、そしてなにより母性と儂さを兼ね備え、神々しさを
感じずにはいられない顔つくりであった。これほどの美女を実際に
見かけることなど人生で一度でも機会があるとは思えない。
そんな美しい女性が素っ裸で目の前にふらりと
出てきたのだ。

「あの、みなさん、私と気持ちいいこと
しませんか……？」

全裸という大胆な格好にそぐわぬ
消え入りそうな恥じらい方で美女が
声をかけた。

「お願いします…私…欲しいんです…」

男たちは建物の裏手に彼女を連れ
込むとじらすように取り囲む。

「あ、あの…お願いします…」

みなさんの…」

「みなさんの何が欲しいんだ？」

「みなさんのおち〇ぼ、

おち〇ぼで私を可愛がって

ください…」

「男たちは下半身をむき出しにし、しゃがみこんでいる
彼女の頭上でペニスを突きあげた。全裸の美女は必死に頭上を
見上げ、そそり立つペニスをうつとりと見つめている。

「な、なんでもしますから…みなさんの…しゃぶらせてください…」
美女は四つん這いの体勢から腰を突き出すと大きな尻を振り始める。

「お願いします…みなさんのおち〇ぼ舐めさせてえ…」

「ジューポツジューポツジューポツ」

美女の口が男のペニスをいやらしくしごき立てる。

「おいひい…チ〇ポおいひいでぶ…」

すぼめた口がきつく陰茎をしぼりあげ、舌ではげしく

鬼頭を舐め回す。口中のレロレロとくもった音が

男たちの耳まで聞こえてくる。

「チ〇ポだいすきい…のまへてえ…みなさんの

ザーメン…おくひのなかにいっぱい出ひてえ…」

ぬつちよりと音を立てながら至福の表情でペニスを

頬張る美女。右手で口のペニスをしごきながら左手は

別のペニスを弄り、シコシコと絶え間なく律動する。

両手が塞がっているため愛液を垂れ流している股間を

愛撫できず、もどかしげに腰を前後させている。

居ても立つてもいられなくなったのか恍惚とした

表情はやがて苦悶へと変わり、躊躇の体勢から股間を

突き出し、ヒクヒクとわななく陰部を少しでも

癒そうと前後に振り始めた。振動に合わせて愛液が

宙に舞い、糸を垂らして振り子のように垂れ下がる。

美女は残りの男に股間をアピールして切なそうな顔で

哀願する。M字の谷の部分が前方へと突き出しに

なった下半身はカエルの醜さを想起させた。

男はニヤニヤと嘲笑いながら美女の懇願に気付かない

振りをしてスマートフォンでの撮影を続ける。我慢が

限界に達した全裸美女はついに声をあげた。

「お、おま〇こ、おま〇こいじつてください…」

指でおま〇こいじつて、ぐちよぐちよしてえ…」

ガニ股で男に向かって腰を最大限に突き出し、剥き

出しにされた陰部が割れて中の肉贅がはみ出す。

ぬらぬらとした愛液がだらりと太い糸霰となって

垂れ下がり、陰唇が餌を探す生き物の口のように

ヒクヒクと激しく痙攣する。

男はスマートフォンを覗きながら指ではなくペニスを

彼女の陰部に当て、ずぶつりと二気に挿入した。

「ツ—————！！☆※△#！！」

声にならぬ叫びを上げて美女がのけぞる。

「ツァー———ア———ツイグー———イツチャラ———っ！！」

体中をガクガクと痙攣させると、全裸の美女—

ヘルタンディー—は股間から液体をほとぼしらせ、動物

のような悲鳴とともに絶頂に達した。

久しぶりに蟹一さんと海に来たら男の方に誘われたのでその場でシートを敷いてお相手をしました。

「蟹一さん、すぐ終わっていただくので待っててくださいね」

後ろからしていただいですぐに

出していたんですけど、

終わってもまたすぐに求められて

次は正常位で濃密に愛し合いました。

ディープキスをしながら体中をびったりと

密着させると相手の方がとても愛おしく

なります♡その間も足は開いて大事な

ところを一所懸命にえくつてもらいます。

お腹の中に男の人のあれが入っているのは

とってもしあわせな気持ちで、目の前の人

が大事で大事でたまらなくなり、守って

あげたい気持ちになります。

そんな大事な人が一所懸命に気持ちよく

なるうとしているのを見ると本当に

愛おしくてやさしく包み込んで

あげたくなるのと同時に、そんな

私の体もところどころに気持ちよく

なつて頭から爪先まで触られる

だけで天にも昇るような

快感が襲います。

そんな状態で一番大事な

ところを激しく突かれる

のですから、おかしく

なってしまうのも

当然のことかも

しれません。

「すみません、蟹一さん、
今日はこちらの方とホテルに
行ってきますので先に
帰っててくださいね…」



今日は黒人のお友達とデートです。
朝から晩までホテルに入り浸ってザーメンをいっぱい飲ませてもらいました♡
黒人さんのオチポはとても立派なので入れるのもおしゃぶりするのも大変です。
その上いつも乱暴に扱われるので擦り傷やアザが絶えません。この前は冗談半分で
右腕をむりやり折られてしまいました(笑) たぶん妊娠していたらお産にハンチされたり
ジャンプで跳び乗られたりして無理矢理流産させられたりすると思います♡



いつか妊娠してデートするときのことを考えるととても興奮します♡

彼は鼻の穴や目玉に射精するのが好きみたいでいつも無理矢理出されます。
今日は鼻に出されてザーメンが口から出てきてしまいました（笑）
射精されるのはまだいいですけど鼻の穴におしっこされたりもするので
いつも死にそうになります（笑）



お口で味わうのも好きですけど体中にかけてられるのも大好きです♡
いつかザーメンのお風呂に入りたいな♡

でもやっぱり一番好きなのはおま○こにどびゅどびゅ♡
ああ——中出しが一番だいすき♡
ものすごい量の精液をお腹の中に出してもらうの最高です（笑）
お馬さんとセックスしてるみたい。



あ、でももし赤ちゃんができれば誘われても
デートしないように気をつけないと…。
だってみなさんも私が黒い赤ちゃん生むところ
見たいですよ♡

「どうぞ…好きだけ見てくださいいな♡
…ごじつてもごじつですよ」

「そう…ゆっくりひだに沿って這わせて…
やぞくへすってくださいな」

「あ…すいんごう…気持ちささ…♡」

「あ…そう、もつと…いいっ…」

もつと激しく…穴に、穴に指を入れてっ

穴を指で掻き回すのっあももつと、

もつと激しく…ささ、イッのっ♡」



「せつと、もつとおま〇ごじつしてっ
思い切り掻き回してっあーッ、あっ、だめー
ま、まって、やめてっ、まだ、あっあっあっ
まだだめっ、と、とめてえっ…」

「……ごめんなさいね、とめてしまつて…あなたの一番初めは
ふたり一緒に気持ちよくなりたいの。
女の人って気持ちがいいるともはしたなくなってしまうのよ♡
いやらしい言葉を何度も叫んでしまうの。」
『おま♡こ気持ちいいです♡』「て」
「よく見て、つぎはあなたのおち○ちんをここに入れるの。
おち○ちんとおま○こを擦り合つて、お口の方は相手の
舌や口の中をなめまわして互いに唾液を飲ませ合うのよ♡
そして最後におま○この中におち○ちんから
赤ちゃんの種を発射するの♡」
信じられないくらい気持ちいいのよ♡」

「ああ…おちん○ちん…くっつく…くっつく…
そのまま腰を前に突き出して…ゆっく…
ん…♡」



「おち○ちゃんが私のおま○こで包まれているの感じる？
ね、やわらかくてぎゅうぎゅうでとても気持ちいいでしょ？
すごい…あなたの心臓の鼓動がおち○ちゃんを通して伝わって
きている♡どつくんどつくんって脈打ってるのが判ります(笑)
ね、このままおち○ちゃんとおま○こをこすり合わせるの。
私のおま○このお肉があなたの硬いおち○ちゃんをしごいて、
二人で一緒に天国にいるような気持ちになるの…そう…
ゆっくりと腰を動かして…はずれないように最初は少しずつで
いいから…突くときに奥まで差し込むように意識して…
あ…いいわ…その調子…そう…ね、擦れあってるの
分かるでしょ？とても気持ちいい…おち○ちゃん
おま○こが溶け合って一つになっているみたい…そうよ、
そう、とてもいいわ…もっと激しく…もっと強く打ち
つけて…！」

「ああ…いい…すげえ上手よ
そうもつとえぐるように…ああー
いい、気持ちいい♡おま○こ気持ちいい♡
大好き♡…ね、キスして…あなたの唾液を
たくさん飲ませて…♡んん…ああーもつと♡」



「今日は何回も射精しましたね…(笑)
大丈夫？気持ちよかったですか…？
私も…脳天がしびれるくらい…とても気持ちよかったです…
だめですよ、もう今日は…親御さんが心配されます…
またいつか…機会があったらお会いしましょうね♡
そうですね…もう少し大きくなったらどこかで私のことを
耳にするかもしれません…」

「もう少しだけこうして恋人同士のように
抱き合っていますよね。目が覚めたら私のことは
忘れていきますから…」



「そろそろそろ出すぞっ」
「はいっお願いしますっおま●こに出してくださいっ◎」

螢一の出動後、男たちを迎え入れたヘルタンディーは朝から濃密な愛の営みを楽しみ、昼食や湯浴みなど甲斐甲斐しく世話をした。男たちの下の世話ー小便を飲み干してうっとりするヘルタンディーに男たちは大便を吐えさせ、ヒースサインで記念写真を撮った。部屋という部屋で男たちとヘルタンディーは交わり、あらゆる所に愛液や精液、そして小便が飛び散っている。居間では畳の上でヘルタンディーの放尿が披露され、足の踏み場もないほど一面が小水まみれになっている。次第に交わる場所がなくなり、廊下へ玄関へと移動した。

「……」

びゅびゅー、ひゅひゅーっ

ヘルタンディーの子宮に精液が注ぎ込まれる。

「あっあっあっ……すこいっ」

おま●こにたくさん出てるっ♡ああくん最高♡」

ヘルタンディーの腹内に収まりきらなかったザーメンがぼたぼたと床の上に落ちる。



「はいではこちらへんでお願します」
カメラを構えた男が声をかける。
ヘルタンディーたちは早朝、近場の観光地へビデオ撮影をしに訪れていた。一行ははたから見るとあきらかにそれが目的と分かるような怪しさを隠そうとせず、少し値段を張り込んだビデオカメラを構えた男と照明用のレフ板を手にした男、その他3〜4人の若い男たちが美女一人を囲んで場所を物色するように歩いている。真ん中の美女は眸のラインがはつきりと分かるような薄手のカーディガンを着、露出した太ももの上部からは時折黒い影が見え隠れする。後ろに回れば丸いヒップラインが歩くたびにやわらかく揺れている。裾がすり上がるたびに恥ずかしげに手で引きずり下ろすが股間を隠すには明らかに丈が足りておらず、さらにその薄さからカーディガンの下が全裸であることは誰の目にも明らかだった。通りはビジネス街や学校からは離れているためかまたほとんど人影はなく、一行は大胆にも路上で撮影を始めた。



男の合図を聞いてヘルタンディーは羽織っていた白いカーディガンをはだける。「はい♡よろしくお願します」朝日に照らされた白い肌、豊かで弾力のある乳房、大きいか適度に均整の取れた尻、そして整えられた柔らかな陰毛がいちどきに晒け出された。「じゃあまず全裸で公園のまわりをお散歩してみましようか」ヘルタンディーは言われるまま路上の全裸散歩を始めた。時折路肩にしゃがみこんで小さな花を覗き込んだり、枝に止まる小鳥に話しかける裸のまま楽しそうに散歩する様子は清純さと淫靡さが交わり、まわりの男たちに異様な性的興奮を呼び起こした。ヘルタンディーは歩道の端に電柱をみつけるとその場に立ち止まった。「あの、ここを使ってもいいですか？」笑顔で尋ねると電柱のそばで恥ずかしげに気取ったポーズをとる。撮影されながらしばらくモジモジと当たり障りのない格好をしていたが、やがてカメラの前に股を広げ、かすかに震えながら性器を露出させた。「はい、ここが私の大事なところですよ♡」震える指で性器を逆V字に広げ、穴の奥まで開いてみせる。

「奥まで見えますか？♡」ヘルタンディーはじつくりとカメラに撮影させると逆の手でピースをする。にこやかな笑顔とは逆に顔面は赤く染まり、眉は苦悶に歪んでいる。全身にじつりと汗が浮かび、性器は時折ヒクツと震えて愛液がにじみ始めた。「いまからおしっこしますからみなさん見ててくださいね♡」そう言うのと体を向き直し、電柱に向かって放尿を開始した。勢い良く出た小水はコンクリ製の電柱にあたって八チャ八チャと音を立て、跳ね返ってヘルタンディーの足を濡らした。カニ股で放尿していたヘルタンディーは次に片足をあげ、横M字の形になって排尿を続ける。陰唇が邪魔をし不規則に尿が飛び散る。下半身に力を入れると尿の勢いが増し、綺麗に弧を描いて電柱を濡らした。飛び散った尿が朝日に当たって小さな虹を作り、気付いた男たちが囁し立てる。「え、虹ですか？うそー♡すこーい♡」

ピースしながら放尿で虹を作るヘルタンディーの生写真はその後高値で売れまくった。路上での小便が終わってもヘルタンディーの上気は消えなかった。それどころか電柱に思わせぶりに近寄り、うすうすと落ち着かない様子を見せる。そして四つん這いになると電柱の根本に舌を這わせ、自分の小便を舐め始めた。尻をふりんと突き上げ、顔は地面に這わせてゆっくりと丁寧に尿を舐めあげる。犬の散歩コースにもなっているであろうこの電柱でうっとり尿を味わっている。しばらくすると今度は電柱に体を密着させてこすりつけ始めた。全身に自分の小便が移るように濡れた電柱に胸、背中、腰を順番にこすりつけ、

それでも足りない地面の水たまりになった小便に横ばいになって全身を小便まみれにした。匂いが移ったのを確認してしあわせそうにしているところで撮影されているのをふと思いつき、取り繕うようにカメラにピースして首を傾けながら恥ずかしそうに微笑む。そして立ち上がるとあらためて電柱に抱きついた。恋人に抱きつくように愛おしそうに電柱にまとわりつくヘルタンディー。両腕と片足を廻し、腰を突き出して性器をコンクリートで直に擦り始めた。「あつあつ：あつ：ふつ：ふんつ」快楽の悦びで表情は恍惚となり、白痴のような笑顔があらわれる。猿のように腰を振り電柱で性器を愛撫し続ける。「ああーっこれ好きーっ♡硬くて冷たいの気持ちいいのーっ♡♡」普段から一人で電柱オナニーしているかのように慣れた腰つきで激しい自慰を見せつける。ヘルタンディーはカニ股になって激しく腰を打ち付け、続いて性器が擦り切ればかりに何度も大きくクライマックスさせた。「おっ：おっ：うあああつ：あつ：ああーっ♡♡♡♡♡」電柱に張り付いたまま大きく何度も痙攣し普段からは想像もつかないような野太い声で絶頂に達した。

ヘルタンディーは大きく崩れ落ちると撮影されているのも構わずその場に横たわった。極度の絶頂で脱力しているのか手足はあらゆる方向を向き、何度も肩で息をしている。うつ伏せて美しい尻がこちらを向いているが、表情を伺うことは出来ない。撮影は始まったばかりだが早くも多くの人間が周りに集まり始めていた。

「はい、生で出した方は生で大丈夫ですよ♡
でも最近のみなさんコンドームつける方が多いですけど(笑)
私は病気はもってないですけど名前も知らない飛び入りの方も
増えましたから(笑) みなさん用心なさってるようです。
會員制のパーティーも開いてますから、生で楽しみたいときは
そちらに参加していただいたほうがいいかもしれませんね」

「え？本当に生でしていただけるんですか？
嬉しい♡他のみなさんよりいっぱいサーブしますね♡
だっておま○こに直接出していただけるのって死ぬほど気持ちいいんですから(笑)
他の方はコンドームにいっぱい溜めておいて、あとで飲ませてくださいね♡」

